手なれの文に　はさみては
夜毎の夢も　露しげし』

少女子　小林恒

一、明治の御代の乙女子は　たかき光りを仰ぎつゝ
心も清く身もつよく　ありし昔のかたみなる
母ともなれや正行の　妻ともなれよ忠興の
二、大和島根の女郎花　露のなさけも天地の
深き恵にそぼちつゝ　雨にも風にも撓みなく
八重と一重に芳しく　世界の園に咲きいでよ

梅（竹柏園歌會兼題）

すりなかす墨のかならて窓近く匂ふや庭の梅の初はな　増山みゆき子
うなゐ子かせわしくわれにしらせけりはちの梅か枝花のさきぬと　大河内國子
樺山常子

池の上にちりうく梅の花ひらを餌とや見るらん鯉のむれくる　兒玉千代子
春なさみ巣こもりしたる鶯もまつ咲く梅にゆめさますらん　松井とも子
なきわこさ去年はとひこし木下川の老木の梅の今さかりなり　宮本よりは
北向の梅のしこ枝咲にけりきりのこされてうりのこされて　大竹以勢子
祖父君のゝに植なへし梅林春くる毎に裏をそだもふ　松浦島子
ありし世に好みてめてし人なちんおくつきのあたりあまた梅あり　淺井鐵子
しきみうるみ寺の門のちさき家のみなみの軒にうめの花さく　堀孝子
けふあすはまた早けれと師の君に折りてさゝくる軒の梅かえ　堀越科子
風寒みちりくる花を袖にうけて梅のこかけにうなゐこ遊ふ　大村八代子
御社に筆奉り梅たちて手習そめし昔ゆかしき　長谷川柳子
そゝろにも筆とりて見ん朝かな紅梅にほふひんがしの窓　久保花子
一つ樹に一つ苔の梅なからおくれ先たつ宿世ありけり

初午に友と遊ひしうふすなの昔の梅は今か咲くらむ　中村文子

はつうまの祭にきはふ森かけの稲荷のみまへ梅咲きにほふ　有賀晴子

月寒く梅か香かをる畑道を折枝さけてゆく法師かな　市田豊子

ゆけとゝく梅さかりなりいつこにも春のいたらぬ里やなからん　水山鮭子

垣ゆひしあるしはうせて里の子のかさしとなりぬ紅梅の花　長谷部和子

梅の花うつしうゑしより都なる友もよひけり此山里に　四谷朝子

月の瀬の道の行手の里つゝきにほひゆかしく梅か香そする　池谷久子

幼兒のいたかれなから手をのへて一花つみぬ紅梅のはな　關屋愛子

玉ほこの道のかたへの梅の花しはし旅人の心れきらふ　四方鐵子

紙のへてうつし見んかな文机のかさしの梅のあまりに清き　金井繁子

賣家の庭せまふして紅梅の主まち顔にほころひにけり　田中千嘉子

原田信子

汝か友の庭の紅梅花さきぬいさ鶯にあひにとひ來よ　岩本芙玖子

春の日を背中にあひて物ぬへるおうなか宿の梅さかりなり　岡田文子

一村に春の日みちて梅さけりかしこの軒もこゝの川へも　鈴木安子

わか宿の一木の梅の花の香に思ひこそやれ月の瀬のやま　羽田晴子

みさり子の笑み初めたる朝より園生の梅もゑみ初めけり

佐々木雪子

幼子のいたつきまたくいえしより
あけたる窓の梅さきにけり

佐々木信綱

峰の八峰里の七里咲つゝく
梅の中ゆく谷川の水

或人の結婚の折に　靜子

常盤なる松の二葉の若みとり
ふかきちきりは千代もかはらし

別れし友の許に　同